

特別活動と社会科学習の連携

－自然体験活動における読図ハイクのすすめ－

吉岡 治

1 はじめに

多くの人がスマートフォンを持つようになり、旅先や仕事で目的地を探すために紙の地図を広げることは少なくなった。むしろスマートフォンの利用により、以前と比べて地図を見る機会は多くなったかもしれない。

だからといって地図の活用や読図技能について、スマートフォン利用の増加に比例してその技量が身についたというわけではない。スマートフォンに表示される地図の多くは、基本的に市街地において目的地へ誘導するための位置情報サービス（Location Based Services）を活用したルートマップアプリの地図である。そのため、一部のアプリを除いては必要最低限の情報しか盛り込まれておらず、地図画面の拡大、縮小機能や目的に応じた案内表示機能を利用することで目的地へ辿り着くことができる。極端なことを言えば、周りの景観を一切見なくても、スマートフォンを見るだけで済むのである。最近は地図アプリの入った登山用の腕時計型スマートフォン（スマートウォッチ）さえあり、紙の地図を使用する機会は減少している。

一方で、自然災害による被害が顕著となり、ハザードマップの理解だけでなく、地形の形状やその変遷を把握することで災害の未然防止を図ることや、災害発生時における迅速、且つ的確な判断と行動のための技能が必要とされている。また、健康への関心や余暇の充実により、多くの人が登山やハイキングを楽しむ中で、地

図を正しく活用できることが望まれている。

有名な高山であれば多くの登山者が訪れるが、低山では人がほとんど入ることのない場所もあり、そのようなところでは読図の技能が必要となってくる。前述のように、登山に特化したスマートフォンや地図アプリもあるが、そもそも電子機器を山中で活用するには限界がある。

中学校社会科地理的分野では、地形図、主題図の読図や作図などの地理的技能を身に付けることになっており、地域に関する情報の収集と処理も含め、次期学習指導要領において系統的に学習することとなっている。ここでの系統性とは、地理的技能について「一度の学習や経験で身に付くというものではなく、それに関わる学習を繰り返す中で、次第に習熟の程度を高めることで身に付けるものであるということで、地理的技能の難易度や段階制などに留意して系統的に学習できるよう工夫する必要がある。」¹ということである。

しかし、読図などの学習を繰り返すことで習熟の程度を高めることは現実の授業では時間的な制約などにより、難しいところがある。教科書の地形図に関する記述を頼りに、縮尺、等高線、方位などの基礎的な学習を行い、すぐに次の内容に移ることが多いのではないか。できれば学んだ技能を活用し、野外観察・調査につなげ、地域に関する情報の収集や処理などの地理的技能も身に付けながら地理的な見方を深められる学びをしたい。

そこで活用したいのが中学校特別活動の学校行事として行われる旅行・集団宿泊の行事である。次期中学校学習指導要領解説特別活動編では、学校行事の旅行・集団宿泊の行事として「修学旅行」「移動教室」「集団宿泊」「野外活動」を挙げているが(現行学習指導要領解説では「遠足」もある)、これらは読図や作図などの地理的技能を高めるよい機会である。

しかし、修学旅行と比較して「移動教室」「集団宿泊」「野外活動」などで行われる自然体験活動では、社会科を含め、教科で身に付けた資質・能力を活用する機会が少ない。修学旅行では、京都・奈良方面などの歴史的遺産の多い地域であれば社会科の歴史的分野に関する学習を行うことが可能だが、「自然教室」「野外教室」などと呼ばれる集団宿泊の行事では、自然に親しむ活動や野外での体験活動が多いものの、社会科の学習内容に関連する具体的な活動はあまり実施されていないのではないかと。集団宿泊の行事で行われる自然体験活動は、社会科の授業で学んだ読図などの地理的技能を活用できる野外で行われることが多いのに、残念ながらそのような場面をあまり見かけることはない。

だからこそ、地図の活用技能を身に付け、地理的技能を高めるために特別活動学校行事の旅行・集団宿泊の行事、中でも自然体験活動が展開される「移動教室」「集団宿泊」「野外活動」といった行事を積極的に活用したい。これらにおいては、普段の学校生活ではできない自然体験を中心とした野外活動などが行われ、自然とのふれあい、学年学級集団のまとまりやそれぞれの関係性を深めていくことをねらいとしながら、中学校では、地理的分野を学習する1年生もしくは2年生を対象として実施されることが多い。

次期中学校学習指導要領では各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進が示され、教育課程全体を通じた取組を通じて、教科横断的な視点から教育活動の改善を行っていくことが求められている。特別活動においても特別活

動解説第2章第2節4で、「それぞれの教育活動が直接的、あるいは間接的に様々な関連をもち、相互に関連し補充し合いながら、それぞれのねらいを達成することにより、全体として各教科の枠を超えたつながりの中で、中学校教育の目的や目標を達成することができる。」と述べている。

そこで、ここでは中学校社会科地理的分野の地図学習を、旅行・集団宿泊の行事の「移動教室」「集団宿泊」「野外活動」として行われる自然教室や野外教室などの自然体験活動においてどのように実施できるか考え、生徒が自然の中で楽しみながら地図について学ぶことのできるプログラムを提案したい。

なお、表題では「自然体験活動」という言葉を用いているが、当初は「野外教育」もしくは「野外教育活動」という言葉を考えていた。野外活動プログラムにおける地図学習という意味で考えた場合、野外活動や自然体験活動を通して行われる教育活動である「野外教育」を用いることは不自然ではないが、教育課程に沿った教育活動として行われる野外活動について、学校現場では「野外教育」の言葉をあまり使っていない。一般的に「野外教育」の名称は定着しているが、少なくとも筆者の体験では、この40年間学校の中でほとんど使われていなかった。そのため、ここでは「自然体験活動」を用いることとした。

2 中学校学習指導要領社会科と地図学習

学習指導要領では地図学習について、これまで述べてきた社会状況の変化に合わせ、現行、次期学習指導要領ともに明確な学習内容を示しており、防災教育についても社会科改訂の要点として示され、地理的分野では「日本の様々な地域の学習における防災学習の重視」を図ることとなった。

次期中学校学習指導要領では中学校社会科地理的分野の目標として「社会的事象の地理的な

見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、(以下略)」とあり、これを受けて「知識及び技能」に関わるねらいとして、「(1) 我が国の国土及び世界の諸地域に関して、地域の諸事象や地域的特色を理解するとともに、調査や諸資料から地理に関する様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。」と示している。

この次期学習指導要領解説社会編では、ねらいの解説の中で、「情報を読み取る技能に関わって、地理的分野の学習で用いられる資料には、地図や統計、写真など様々あるが、その中でも最も重要な役割を果たしているのが地図である。現代のように地域間の交流の盛んな時代においては、社会的事象を位置や空間的な広がりなどを考慮して地図上で捉えることは効果的であり大切である。」「さらに、情報をまとめる技能に関わっては、上記の読図力とともに、特に地理情報を地図にまとめて主題図を作成する作図力などの地理的技能を、地理学習の全般にわたってしっかり身に付けさせるよう工夫することも大切である。」と、読図や作図などの地理的技能を身に付けさせることの重要性を述べている。

このように、「地図学習」という言葉は実際には学習指導要領に出てこないが、これらの読図力や作図力を中心とした地理的技能の学習について、ここでは「地図学習」としていきたい。

次期学習指導要領における地図に関する記述はまだあり、解説社会編「C 日本の様々な地域 (2) 地域調査の手法」では、「ア (イ) 地形図や主題図の読図、目的や用途に適した地図の作成などの地理的技能を身に付けること。」として、「地理的技能を身に付けるについては、地形図や主題図などの様々な資料から、地域で見られる事象や特色など必要な情報を的確に読み取る技能や、地域で見られる事象を、地図や図表、グラフなどに表現する技能を中心に、歴史的分野や他教科等で身に付けた技能の活用も

視野に、地域調査の手法として身に付けることを意味している。」とある。

また、次期学習指導要領では、地図に関して地理情報システム (GIS) の活用だけでなく、国土交通省国土地理院の「地理院地図」などの公的機関や、様々な機関、団体が提供する地図ソフトなどから地理情報を入手、活用し、「地理的認識を深めたり地理的技能を高めたりするとともに、情報や情報手段を適切に活用できる技能を培う観点から、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段の活用を積極的に工夫することが望まれる。」などとして、従来の地図学習に留まらない活用を示している。

なお、防災教育については、現行学習指導要領では限定的な記述であったが、次期学習指導要領においては「C 日本の様々な地域」全体に関わり、「我が国の地形や気候と関連する自然災害と防災への取組を取り上げることで、日本全体の視野から日本の自然環境を大きく捉えることを意味している。」とした。

ハザードマップの記述についても現行学習指導要領解説社会編では「ハザードマップから人口規模に対して地域住民の安全が守られる街になっているのかの課題が考えられる。」となっているが、次期学習指導要領解説社会編では「地震に伴う津波や火災などの災害を想定する場合、地元自治体によるハザードマップや国土地理院による旧版地形図、土地利用図などを含む文献調査とともに、実際に学校周辺の地域を観察や野外調査することが大切である。詳細な地図と実際の様子を照らし合わせる中で、生徒は地形や住宅地の分布等に留意し、浸水や土砂崩れ等の危険がある場所、避難場所の位置やその標高、道路網やその幅員、避難経路の安全性 (ブロック塀等の倒壊の危険箇所や側溝の蓋の有無、くぐり抜け式通路の冠水等)、自動体外式除細動器 (AED) の設置場所などを調査項目として観察や調査することが考えられる。」とかなり具体的な記述となっており、ハザードマップのみならず様々な地図をもとに細かな防

災のための視点を示した。

ちなみに高等学校で新科目となる「地理総合」は、「地図と地理情報システムの活用」「国際理解と国際協力」「防災と持続可能な社会の構築」の3つの柱で構成されているが、ここでも地図を含めた地理的技能の活用が示されており、地理的分野において読図や作図の地理的技能の習得とともに、様々な地理情報を入手、防災も含めてその活用を目指していることがわかる。

このように、社会科地理的分野の学習において地図に関する地理的技能とその活用が重要視されていることは理解できるが、これらの内容を社会科教師が現在の環境のもとで行うことは、易しいことではない。

例えば、現行学習指導要領の「身近な地域の調査」では「縮尺の大きな地図や統計その他の資料に親しませ、それらの活用の技能を高めるようにすること。また、観察や調査の結果をまとめる際には、地図を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、意見交換をしたりするなどの学習活動を充実させること。」と、地図の有効活用を示している。この単元は地形図と実際の景観を比較するよい機会でもあるが、現実的には地理教科書の最後となる単元に時間的余裕がないことも多い。

今後は中学校社会科において地理が120単位時間から115単位時間となり、地図技能を習得する時間が確保できず苦勞している中学校社会科教師はさらに悩むところである。実際には生徒によって小学校の地図学習で習得した技能に差があり、基礎的な事項から指導する必要があるうえに、校外への生徒引率について、安全面や他教科との関係も含めて躊躇せざるを得ない現実があるのも確かである。

このことについて永田成文は、「中学校の野外調査となるとほとんど実施されていないのが実情である。野外調査の実施は、生徒自身の観察・実測・聞き取りの能力が求められるとともに、教師の多大な事前準備と調査の指導力が必要となる。また、教師の校外学習に対する抵抗

や、1時間(50分)という制約がある。そのため、教科書の事例研究の野外調査の方法を読むだけで終わったり、工夫している場合でも身近な地域の25000分の1地形図などを活用した読図で終わっている。」と述べている。²

また、篠原重則による香川県における中学校社会科地理学習の「身近な地域」の授業がどのように展開されているかについての実態調査(1994年)³では、回答数中学校65校のうち、野外観察を実施している学校が10校、実施していない学校が55校となっており、野外観察を行っている学校においても教師が校外に引率して観察させる2校、生徒のグループで観察させる2校、生徒個人で観察させる3校、遠足など学校行事で観察させる7校となっている(複数回答あり)。地域調査についても回答64校中、地域調査を実施している15校、実施していない49校となっており、実施している学校で最も多かったのは生徒個人で観察させる7校で、遠足などの学校行事で調査させる4校などとなっている。なお、等高線に関して断面図の描き方を指導していると答えた学校は65校中63校だが、尾根線、谷線を記入する指導をしている学校は65校中30校となっている。

このような状況について、現在に至っても改善されているとは思われず、むしろ時間数や現行学習指導要領の内容容量、学校を取り巻く環境の変化を考えると、地図に関する学習に費やす時間や学校の外へ観察・野外調査に出かける機会は減っているであろう。

次期学習指導要領では、地域調査を目的の違いによって、観察や野外調査、文献調査などの実施方法を学ぶ「地域調査の手法」と、地域の将来像を構想する「地域の在り方」の二つの中項目に分けているが、以前にも増して適切なカリキュラム・マネジメントによる綿密な授業計画が要求されることになる。

3 旅行・集団宿泊の行事と教科学習

限られた時間の中で読図などの地理的技能を習得し、活用するためには、各教科の枠を超えたつながりの中でその目的を達成することが望まれ、そのために旅行・集団宿泊の行事を活用することができる」と述べたが、ここでは「移動教室」「集団宿泊」「野外活動」などで行われる自然体験活動に焦点を当てたい。その意味では宿泊行事だけでなく、登山やハイキング、オリエンテーリングなどの「遠足」も含まれる。

修学旅行も旅行・集団宿泊の行事だが、中学校では主に3年生で実施され、目的地にもよるが野外教育活動よりも京都・奈良などの歴史文化学習が中心となることが多いため、班行動時に必要な読図以外は地図を活用する機会が少ない。本来は修学旅行も読図や作図などの地理的技能を高める機会としては有効であるが、ここでは、1,2年で実施される自然体験活動を中心に述べる。

中学校特別活動で行われる学校行事の旅行・集団宿泊の行事については、次期中学校学習指導要領解説特別活動編において実施上の留意点として、「指導計画の作成とその実施に当たっては、行事の目的やねらいを明確にした上で、その内容に応じて各教科、道徳科、総合的な学習の時間、学級活動などとの関連を工夫すること。また、事前の学習や、事後のまとめや発表などを工夫し、体験したことがより深まるような活動を工夫すること。」と記述している。

学校行事の指導計画についても、「具体的には、特別活動の他の内容や各教科等で身に付けた資質・能力などを、学校行事においてよりよく活用できるようにすることである。また、学校行事で身に付けた資質・能力を各教科等の学習に生かすことである。特に学校行事は、平素の教育活動の総合的な発展の場であるため、日常の教育活動の成果が生かされるようにすることが大切である。したがって、学校行事の指導計画も、各教科、道徳科、総合的な学習の時間

及び特別活動の他の内容などの指導計画と有機的に関連し合うように作成することが大切である。」と述べ、それぞれの教科の教育活動が直接的、あるいは間接的に様々な関連をもち、相互に関連し補充し合いながら、それぞれのねらいを達成することで、全体として各教科の枠を超えたつながりの中で目標を達成することを示している。

このように、社会科で身に付けた読図などの地理的技能を旅行・集団宿泊の行事で活用し、また、行事で深めた技能をさらに社会科の学習に生かすことが重要で、そのために社会科の指導計画と学校行事の指導計画を有機的に関連し合うように作成したい。

さて、ここまで旅行・集団宿泊の行事における地図学習の活用について述べてきたが、実は現在の中学校において、地図学習を活用することのできる自然教室や野外教室などの「移動教室」「集団宿泊」「野外活動」を行うことは難しくなっている。理由としては、

- ・授業時数の逼迫により、宿泊を伴う行事が難しくなった。
- ・安全管理上、野外活動を学校の教育活動に位置づけることが難しくなった。
- ・教員の高齢化が進み、身体的・体力的な問題から難しくなった。
- ・実施に必要な野外活動（宿泊）施設が老朽化もしくは経営上の理由で減少した。
- ・実施費用の保護者負担が難しくなった。

などが挙げられる。

実際に宿泊日数を減らしたり、宿泊行事を修学旅行に限ったりする学校も出てきており、⁴ 自然体験活動を学校で行う意義を明確にしなければ、ますます遠足と修学旅行以外の旅行・集団宿泊の行事が減少していくに違いない。このことから、社会科の地理的技能を高める機会として「移動教室」「集団宿泊」「野外活動」などを位置づけ、これらの行事が学校の教育活動にとってどうしても必要であることを広く唱えていくことが大切である。

そもそも高度経済成長期に野外活動施設が増え、学校での野外活動体験もあってスキーやキャンプなどが一般的になったわけだが、その後バブルがはじけるとともにそれまでの野外活動が下火となった経緯がある。学校の自然体験活動を中心とした旅行・集団宿泊の行事もその影響を受けており、この中学校における旅行・集団宿泊の行事の課題や自然体験活動、野外教育の変遷については、文部省（当時）、文部科学省などの施策や公的・民間施設、社会教育の変化も含め、できれば別の機会に詳しく論述していきたい。

4 宿泊的行事における野外教育活動と地図学習

では、中学校で行われる自然教室や野外教室を、地図の読図などの地理的技能を高める場としてどのように活用できるだろうか。

青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議の「青少年の野外教育の充実について（報告）」⁵では、「野外教育プログラムは、ややもすると、自然の中で行われる各種の活動種目の選択や、その活動種目を時系列に並べた日程と考えがちである。しかし、野外教育プログラムは、単に活動種目や日程を指すものではなく、教育目的、指導方法・指導形態、活動種目等が一体となったものとして考えるべきである。」「最近では、理科や社会などの教科との関連に留意し、活動種目によっては、それぞれの教科に位置付けた取り組みも見られる。」と、学校が実施する野外教育プログラムについて述べている。

しかし、実際に中学校で行う活動は、日頃経験できない自然の中での体験活動などのねらいに結びつけたものが多く、日頃の教育課程での教科学習との関係で言えば、体育科と関連する健康安全、体力の向上などが考えられる。

そもそも野外での活動は体育科との関係が深い。登山やハイキングを行う場合も、集団行動

の充実や人間関係の深まりについてのねらいとともに、健康的な生活や、体力の増進など体育的なねらいのもとで行われることが多い。逆に言えば、読図などの地理的技能をねらいとして展開する活動は少ない。

これは中学校における自然体験活動やレクリエーションについて、体育科教師の影響が大きかったことも理由として挙げられる。筆者が教師になった1980年代、宿泊の行事や遠足などは集団行動の育成や生徒指導の場として実施され、体育科教師が指導する場面が多かった。教師を目指す体育系学生は大学で野外活動やレクリエーションについて学ぶ機会があり、教師となってその実践を行う中で、学校における自然体験活動の中心的役割を果たすようになった。その活動内容を引き継いで体育科以外の教師も自然体験活動の担当になっていったが、教科による行事担当者の偏りがほとんどない現在でも、依然として自然体験活動の中に、社会科の地図学習を計画的に組み込んでいる学校はあまりない。これは現在でも野外教育の研究者、指導者の多くが体育系の大学や専門学校で教えており、野外教育を専門に学ぶ場合は体育系の学部学科、専門学校を選択することが多くなる。

一方で体育科以外の教職課程において野外で行われる教育活動を授業で学ぶことは少ない。社会科の教師を目指す場合でさえ、地理学のような専門的な学科でなければ野外調査、観察などのフィールドワークを行う機会は少ない。そのため、オリエンテーリングやウォークラリーが学校行事に登場しても、それを社会科の学習と結びつけようとすることは社会科教師の発想の中にはなかった。

それではどのように中学校の旅行・集団宿泊的行事、特に自然教室などの自然体験活動が行われる行事で地図の読図などの地理的技能を習得、活用する機会をつくり、また実際にプログラムとして活動することができるのだろうか。

一般的に中学校で旅行・集団宿泊的行事を行う場合は、当該学年で役割分担し、計画を立案

する。当然ながら学校教育目標の下、その行事の目標を設定し、そこから日程、プログラムの詳細を決めていく。ここで大切なのは、企画立案時にしっかりと提案することである。

教科の目標と学校行事の目標が有機的関連をもち、両者の目標を実現することのできる立案を行うことになるが、一つの教科のために行事全体を調整、組み込むことは容易ではない。実施学年に社会科教師がいることが必須だが、実際には学年毎に場所や日程、目標、職員構成が変わることがありうるので、できれば継続的な学習活動として校内で位置づけたい。そのためには「校外宿泊行事委員会」など、学校運営組織の中で学校全体の方針として教育課程上の位置付けをすることが必要である。

ここで気をつけたいことは、学校で行う自然教室や野外教室は、あくまでも野外での自然体験活動が中心になるということだ。金銭的負担を負わせ、学校を離れて自然豊かな場所へ行く理由を考えれば、普段体験できない自然に親しんだり、寝食を共にすることで学年学級の間人間関係を広げたり深めたりするなどの、行事を実施するうえでの大切な目標をまず意識する必要がある。社会科の学習は自然に親しみ、集団内の人間関係を深めていく中で学習効果を高めることができるのである。

江橋慎四郎は「野外教育というのは、(中略)教育の方法として野外ないしは学校外の自然資源、社会・文化資源を教育のために活用しようとする教育の方法なのである。したがって、野外教育は、教育の学習成果を高めるために野外を積極的に活用しようとするものであり、このような意味ではすべての教科が関連し得るのである。もちろん、理科や社会科の学習のためにはよく利用され得るのであるが、例えば国語で和歌、俳句、詩の学習の場合など教室で学ぶよりは自然に直接触れることによって学習効果を高めることができるのである。」と述べ、「初期の段階では自然環境の中での教育ということが主張されたが、今日ではさらに、広く、社会・

文化環境をも積極的に活用すべきだと考えられるようになり、(後略)」と、環境、資源を自然のみに限定しないで広くとらえ、教育の効果を高めるために教育の場を学校外に拡大し、野外を教育の場として積極的に活用しようという考え方を示した。⁶

つまり、野外教育は自然に親しむという目的だけでなく、野外の自然環境や社会・文化環境を生かして社会科の学習成果を高めるという目的をもつことも大切な特色だということである。自然に親しむと同時に、学校の教科学習を野外で行うことが教科の学習効果を高めるという野外教育の本質も理解したい。

5 読図ハイクのすすめ

それでは野外での活動の特質や利点を生かしながらどのように地図学習を展開できるだろうか。前述の「青少年の野外教育の充実について(報告)」では、「ややもすると、自然の中で行われる各種の活動種目の選択や、その活動種目を時系列に並べた日程と考えがちである。」「プログラムは、単に何をするかだけではなく、何のために、どのような方法で行うかという視点が必要である。」と述べていたが、多くの学校が野外炊飯やハイキング、オリエンテーリング、キャンプファイヤーを漫然と組み合わせて実施しているのではないだろうか。

その中で、教科学習をどのように取り込み、学習効果が高まる活動にしていくか考えなければならないが、日々の忙しさに追われ、例年通りの活動を準備、実施することが多くなってしまふと思われる。できれば既習事項を盛り込みながら、地形図を利用したフィールドワークをグループや学級単位で行うことができるとよいが、それだと集団形成や人間関係の深まりについての目標との関係性が薄れてしまうことや、社会科の学習を中心とした活動になってしまうため、他教師の賛同を得ることは難しくなるかもしれない。そもそも、自然に親しみながら楽

しく学べる活動にしていく工夫が必要なのである。

学校が実施する活動で、自然の中で行われるプログラムのうち、地図学習と関係の深いものとしていくつかの活動例が挙げられる。

登山・ハイキング
オリエンテーリング
追跡ハイク・課題ハイク
(課題オリエンテーリング)
ウォークラリー

これらは登山道や施設周辺の管理された野外で行われ、自然と親しみながら集団(学級集団やグループ)での活動を基本にして行われるが、学校の場合、登山・ハイキング以外はもととなる競技や形式に様々な改変を加えて行われるため、それぞれの活動の内容に明確な違いがないこともある。

それぞれの活動について、登山・ハイキングは言うまでもないが、オリエンテーリング(OL)は北欧発祥の競技スポーツで、地図とコンパス(方位磁針)を使用し、いくつかのチェックポイント(CP)を通過してその所要時間を競うものである。ただし、中学校で行う場合はほとんどコンパスを使用しなくても、地図にある範囲の道を歩いて行けばたいいのCPは見つけることができるようになっており、所要時間も競わないことが多い。

さらに、ハイキングとオリエンテーリングを組み合わせた内容でCPをクイズ形式の問題にしてその正解数で競ったり、グループ毎に校歌を歌わせたり、ゴールまでに俳句を考えさせるなど、バラエティに富む課題を設定したものが課題ハイクや課題オリエンテーリングとなる。

追跡ハイキングはもともとボーイスカウトやガールスカウトなどで行われている、先行者の残した手掛かりをもとに同じ道程を追跡する活動だが、現在は指定された道順を歩き、課題を解いていくという、やはり課題ハイクと同じような意味で行われることが多くなった。

ウォークラリーは1975年以降行われるようになった活動だが、⁷ 課題ハイキングなどの活動を交差点や分岐点が描かれたコマ図を用いて行うものである。筆者も教師となってすぐに校舎内と学校周辺の道を使い、コースとコマ図を作成して実施したが、その頃はまだウォークラリーという名称は全く知られておらず、実施に向けて苦労した記憶がある。

これら以外にも地図学習とは結びつかないが、自然観察を主体にした観察ハイキングや夜間に行うナイトハイキングなど、多くのプログラムが実施されている。これらの活動を行う場合、宿泊施設や公的なフィールドでは、あらかじめコースや課題が設定されていることが多く、学校も手軽に実施することが可能なので、これらの活動を行う機会が増えた。このことは、学校の野外活動に対する教育的な工夫を妨げる一因になっている可能性もあるが、安全管理に配慮しながら楽しく自然に親しむ活動を実施できるので、これからも学校の自然体験活動の代表的なプログラムとして行われるだろう。

このような状況で、読図などの地理的技能を高めるために地図学習を行うならば、自然に親しみ、集団の関係性を高めながら楽しく活動するこれらの活動を活用し、地図学習の要素を取り込んだ活動にしていくことが最善の方法ではないだろうか。もちろん、地形図をしっかりと利用しながら社会科の地理的技能を高める目的と方法をもってフィールドワークを実施し、既習事項も含めて地図についての技能を習熟する機会があればよいのだが、他の教師の協力を得ながら、数クラス全員の指導を行い、教育的成果を上げることは難しい。

ならば、課題ハイクやウォークラリーの長所を取り入れながら、「読図ハイク」に仕立ててくることのほうが、より現実的であるし、生徒にとっても楽しく、自然の中で活動するため、学習効果も相応にあるだろう。これまでに、課題ハイクなどで地図に関する課題を作ったり、読図の技能が必要なオリエンテーリングやウォー

クラリーで地図を活用させたりしてきたが、読図の技能を習熟し、地理的技能を高めるという目的のために課題ハイクを実施したい。

ここではその目的をはっきりさせるために「読図ハイク」という名称を使用しているが、あえて教科色を出さないために、「課題ハイク」のままにしたり、「地図探検ハイク」「目指せ！〇〇山ウォーク」など、興味関心を高めるような名称にしたりすることなども考えられる。ただし、前述のとおり、学校教育目標の下、行事の目標を設定し、そこから日程、プログラムの詳細を決めていくので、企画立案時にしっかりと提案することが大切である。

そして、継続的な学習活動として校内で位置づけるために「校外宿泊行事委員会」など、学校運営組織の中で学校全体の方針として教育課程上の位置付けをしておきたい。

6 読図ハイクの計画と展開

では、どのように読図ハイクを計画すればよいだろうか。まず留意点として次の点を挙げたい。

- (1) 読図の技能に関する課題作成に適切な活動場所の選択と活動に必要な時間や空間を確保する。
- (2) 自然に親しむための展開を心がける。
- (3) グループ活動を主体として、グループ内の関係性を高める工夫をする。
- (4) 既習事項や、直前の事前学習に関わる課題を考え、生徒が学習事項に関する達成感を得られるようにする。
- (5) 地図に関する課題だけでなく、その地域の特徴や宿泊行事の活動全般に関係する課題や、生徒間及び生徒教師間の関係性の向上を意識した課題を考える。
- (6) 防災教育の視点を課題の中に入れる。
- (7) 安全管理面について徹底した配慮を行う。
- (8) 雨天プログラムの準備をしておく。
- (9) 複数の教師で下見を実施し、周到的な計画を立てる。

この活動が上手くいくかどうかは(1)の事柄にかかってくる。地形図を効果的に活用できる地形の多様性と、教師の安全管理の範疇に入り、実施学年の生徒が数人のグループに分かれて行動できる適度な広さのある空間が望まれる。宿泊する施設のハイキングコースを利用する場合は、地形の多様性に注目したい。

(2)と(3)については前述の通り、自然豊かな野外で行う集団の活動としての教育的効果が期待できるのであるから、そのことを前提にするのは当然である。

(4)については、自然や集団の中での高揚感も伴って達成感が醸成されるのだから、より達成感を得やすい課題を意識して作成する必要がある。

(5)は、レクリエーションの要素が入ることによって集団の親和性が高まり、それが学習効果を高めることにもなるということである。

(6)についても、学習指導要領に示されている通り、できるだけ課題に盛り込んでいきたい。学校が所在する地域と活動場所では、地形や気象条件などの差異によって災害発生の要因も異なるはずなので、そのことを理解するよい機会である。

(7)については、十分に配慮しなければならない項目である。特に読図を行いながらハイキングを行うとなると、例えば地形図を使用する際は必ず止まることが必要であるし、遠方や周囲を観察したり課題を解いたりする場合はグループの生徒全員で安全を確認して行うことを徹底して指導することが大切である。また、荒天時や非常時のエスケープルートの確保、負傷者や病人が発生したときの連絡運搬方法、雷発生時の待避方法、集団からはぐれた生徒が出たときの他生徒の行動確認など、多くの配慮・確認事項がある。残念ながら細かい事項まで綿密に計画しても事故は起こりうる。毎年実施するためにも、事故や怪我の可能性を限りなく0%にする努力を惜しんではならない。

(8)については工夫が必要である。野外で

の通常の活動はできないため、宿舍内もしくは施設敷地内である程度の効果が得られる活動を考えたいが、施設的环境によって可能かどうかの状況は異なるだろうし、他団体や他の客への配慮、施設との調整が必要である。施設内で周囲の景観観察や方位などの学習ができる可能性について下見で確認したい。

(9) について、前項も含めて下見は最も重要な事前準備である。できれば複数の教師が下見を行い、見逃してしまう箇所がないようにしたい。だが、学校によっては下見の旅費が不十分だという現実もある。地方自治体によって状況は異なるようだが、二人分の出張旅費が支払えないということで夜行バスを使つての0泊2日の弾丸旅行ならぬ弾丸下見をしなければならなかったり、一人で下見を済ませたりするなど、これだけ安全管理について学校や教師に対する要求が強くなっている中で、下見に対する十分な費用を用意できない教育委員会や地方自治体があることは残念でならない。何かあったときに真っ向から非難されるのは学校現場なのである。

さて、次にどのような課題を作成することができるか考えたい。この課題の内容によって読図などの地理的技能を高めることができるわけだが、できればその活動場所の特徴を生かした、グループで考え合える課題が望ましい。

課題の出し方は、課題ハイクのCPのように、ハイキング途中に設置したり、出発前に配付しておく課題解答用紙(チェック表)にあらかじめ掲載したりすることができるが、他にも教師が要所に立ち、問題やヒントを出したり、ゴールしたところで振り返りの問題を出したりするなど様々な工夫ができる。

課題例については、ある特定の地域を挙げて、その地形などを指摘して課題例を説明する方法もあるが、汎用性のない例が出てくる場合も考えられるため、ここでは一般的な地形を想定した課題について例示したい。

<課題例>

○等高線に関する課題

等高線を活用して課題地点周辺の土地の形状を読み取ったり、等高線間隔から読み取った傾斜の度合いから、これからの順路の高低を予想したり、標高差を割り出したる課題が考えられる。また、尾根線・谷線を地形図と実際の景観で確認できる機会なので、その課題にふさわしい場所を下見の時に確認したい。他の課題についても、下見の準備段階から課題の構想について地形図や聞き取りなど情報を収集しながら練り、下見時にはそれぞれの課題内容と場所を確定したい。

○方位に関する課題

学校で行われる試験で出されるような方位の問題を、地形図を使いながらそのまま課題として作成できるが、方位磁針を使用して任意の地点の方角を調べたり、方位磁針を使わずに、地形図を頼りにどの方角に進んでいるのか調べたりすることも考えられる。また、地形図にはない自分たちの学校や家の方角を推定することもできる。

○縮尺と距離に関する課題

この技能を使って、現在地からゴール地点などの目標地点までの所要時間を算出して到着時間を予想し、その時間に到着できるようにグループで協力しあう課題も楽しい。高低差や道の曲がり具合をどのように判断するかが鍵となる。また、歩測や目測をさせる課題も競わせると面白い。なお、数学科の協力が得られるならば、事前に簡易測量法を学んでおくと、ボーイスカウトなどが行っているような野外測量に挑戦することもできよう。

○地図記号に関する課題

コース上で確認できる地図記号に関する

課題が考えられる。野外で地形図を調べると、植生記号の田の記号が水田とは限らず、わさびやい草などの田だったこともある（田＝水田ではない）。実際にこのような事例を下見の段階で調べておくといよい。また、植生界を実際に確認したり、土地利用の変遷などを調べたりすることもできる。

○三角点に関する課題

自然豊かな山々に囲まれたコースであれば三角点探しができる。周囲になくても、地形図にある三角点を遠くの山々の姿から推測し、三角点の意味を改めて確認することができる。

○河川や海岸に関する課題

河川であれば、川の流れる方向から上流、下流の確認ができ、分水嶺について考えさせることも面白い。河川の活用、ダムの意義、さらに危険の予測など防災教育と関連付けた内容にすることも可能である。

○景観写真の読み取りに関する課題

景観写真を持たせ、地形的特色を頼りにその撮影場所を特定することや、出発前やゴール到着時に景観写真を見せて道程の学習の振り返りをすることも可能である。

逆に、ある地形の写真や絵を生徒に撮らせたり描かせたりして、他のグループへの課題にしたり、発表活動に使用したりすることも考えられる。その他、植生や土地利用を確認させたり、季節の違う写真を使って時期による景観の違いを調べたりするなど、様々な景観写真の利用ができる。

○山座同定に関する課題

一度は聞いたことのある名の山々を眺めることのできるコースならば、地形図と照らし合わせて山座同定ができる。逆に他の山に遮られて見えない山を、地形図を使っ

てどちらの方角にあるのか地形図から推測することもできる。

○「一般的共通性」「地域的特殊性」に関する課題

学習指導要領では、世界や日本の場所や地域の特色に「一般的共通性」と「地方的特殊性」があり、相互に関係し合っていることから、この二つの性質を関連付けて扱うことが大切であるとしている。ここでは、学校を中心とした身近な地域と集団宿泊的行事の活動地域の一般的共通性と地方的特殊性について比較したり関連付けたりする課題を考えることができる。

○景観を作図する課題

ある程度見晴らしのある場所で、今いる地点を中心に周囲の景観を地図に表していく作業をグループまたは個人で行う。これは地形図のような精密な地図をつくるというよりも、景観の情報をいかに平面の紙に再現できるかというねらいのほうがよいだろう。等高線を使った高低差や起伏の表現が難しいので、対象生徒の状況によってある程度省略したり、等高線間隔や主曲線・計曲線のルールにこだわらなかつたりすることも必要である。この生徒が表現した図と地形図を比較、検討することで、読図や作図などの地理的技能を高めていくことができるだろう。

その他、活動地域の地形図を吟味し、現地での下見を行うことで様々な課題のアイデアが浮かぶのではないかな。ここで紹介した課題はほんの一部であるから、例えば地理学を学んできた教師であれば、さらによりよい課題をつくることできるはずである。ぜひ、これらをヒントに多くの課題をつくってほしい。

なお、断層などの地質的な課題や中学生の学習範囲を超える課題については、理科の学習範囲に関わる内容や、地理的技能を高めていくこ

とに役立つ内容であれば課題として作成することは構わないが、難解だったり、専門的な技術や判断が必要だったりするなら避けた方がよいだろう。

さて、課題について検討してきたが、実際にどのような展開が考えられるだろうか。展開について留意する点を確認したい。

- ・ 学校での事前学習は地図学習に関して社会科の時間を使うことになるので、あらかじめ授業計画に組み込んでおく。
- ・ 地形図と方位磁針（コンパス）の使用については、地形図を生徒全員に配ることが望ましい。方位磁針が準備できればそれに越したことはないが、磁北や偏差についての理解は難しいため、事前学習で最低限の知識と技術を指導しておく必要がある。
- ・ コース図を別に作成し、必要なときに地形図で課題を解いたり観察したりすることもできるし、地形図にあらかじめコース図を記入しておくことも可能である。板目紙や厚紙、画用紙などに書かれた課題をコース途中に設置する方法であれば、課題のある場所をコース図に載せておくかどうかは課題の設置場所の難易による。課題を設置することが困難な場合などは、課題を別紙で配付し、地形図と実際のコースを照合しながら別紙の課題を解いて歩く方法も考えられる。
- ・ グループの出発前に教師の配置やゴールの準備を終わらせておく。安全管理を徹底するため、必ず当日に教師が事前にコースを歩いて確認する。また、課題の設置について許可が必要な場合があるので注意する。一般の登山者・ハイカーの迷惑にならないようにする。
- ・ グループ行動とし、間隔を空けて出発したい（タイムスタート）。できれば周回コースを設定し、決められた時間までにスタート地点に戻ってくる（宿泊施設等の建物がある場所が望ましい）。短すぎず、長すぎずの活動時間を設定し、グループには課題解答カード

をもたせる。

- ・ レクリエーションとして楽しく活動できるように配慮し、解答に応じて点数を付与するようにしてもよい。ゴールまでの所要時間を予測させ、誤差に応じて点数を付与する方法もある。表彰式があってもよい。
- ・ 事前指導として、地形図を使って机上仮想ハイクを行うことも考えられる。地形図上のコースを辿り、コースの起伏や景色の変化をノートにまとめたり、絵に描いたりして、実際の活動時にそのノートや絵を活用することができる。
- ・ 事後指導は活動したグループによる振り返りや学習発表（この発表のテーマに関することを課題に入れておくのもよい）を行うことが必要で、グループの学習成果を個人にどのように反映させるかが鍵となる。

7 おわりに

これまで、筆者の社会科教員、青少年野外教育施設、野外活動団体での指導体験をもとに、課題ハイキングやオリエンテーリングを工夫して「読図ハイキング」として実施する方法について述べてきた。最後に、この活動を今後、学校で行う際に考えていかなければならないことをまとめてみたい。

○教師の地理的技能向上の課題

いつも課題として取り上げられることであるが、教師自身が地理的技能を確実に身に付けておかなければ生徒への指導はできない。しかし、大学で地理学を専攻した教師は多くない。社会科教員になり、生徒を指導する立場になった以上は、自らの地理への造詣を深め、地理的技能を高めていくために、フィールドワークに出かけたり、研究会に参加したりするなど様々な機会をつくる努力が必要である。

教育委員会などの教師を育成する側も、地理的技能を高める研修を開催するなど、さらなる

取組が望まれる。実際にはそうした地理的技能を磨く研修は数多くないし、参加する余裕も現在の教師にはない。日帰りのフィールドワーク研修や、関係図書の購入に対する援助など、できることもあるはずだが、そこまでの育成と支援がなされていないのが現状である。

そして、これは大学における教員養成の課題でもある。教職課程でフィールドワークや読図などの授業を行うことが必要だし、どの学校にも必ず旅行・集団宿泊の行事があって、すべての教師がその立案や実施に関わる以上、教職課程の特別活動では、宿泊の行事の指導計画案を他教科などの指導計画と有機的に関連し合って作成できるように指導することが大切である。

また、最新の多彩な地図や表現方法について、教育活動への応用を含めた授業を教職課程で行いたい。前述したように、学習指導要領では地理情報の活用に関する技能を身に付けることを示している。そして、そのために地理情報システム（Geographic Information System）やコンピュータ、情報通信ネットワークなどの活用を積極的に工夫することが望まれるとしている。今は野外でGPS（Global Positioning System）を利用することが当たり前になっており、冒頭で述べたように、スマートフォンでの地図利用が多くなっている。地理情報が拡大している中で、社会科地理的分野において生徒に指導すべき地理的技能の範囲も広がっていくのである。

○評価の課題

ここでは評価について触れる機会はなかったが、活動場面を分析すると、様々な課題を解決していく学習の中に評価観点や材料が多く含まれている。ただ、教師が活動中のグループに付き添っているわけではないので、グループもしくは個人のフィールドノートというべき課題解答カードが重要となってくる。

課題解答カードはゴールで回収されるため、教師の手元に戻ってくる。そうすると、ただ解

答を記述させるだけでなく、それぞれの観点を盛り込んだワークシートとして事前に社会科教師が作成する必要がある。地形図を利用する場合は、書き込む欄を作るなどして、観察の様子がわかるようにすることで回収して評価することができる。

活動場面での評価以上に重要なのは事前学習と事後学習である。事前学習なしに現地に行って活動しても、生徒に地理的技能習得の目的意識は生まれない。事前指導あつての「読図ハイク」である。そのために、基本的な読図の方法や、現地の自然状況を生徒に事前調査させることが大切である。

忘れてならないのは、現地で活動する際のグループづくりであり、そのグループで事前学習から事後学習まで一貫した取組を行うことになる。このグループづくりは日頃の学級の間人間関係を考慮した学級担任中心のグループにするか、社会科の教科担任が学習状況を考慮した教科としてのグループにするかによって、事後学習までの学習の取組方法が変わってくると思われるが、多くは前者のグループで実際は当日の活動を迎えることになるであろう。

事後学習ではできるだけグループや個人での発表機会を設けたい。そのためには、「読図ハイク」での課題だけでなく、訪れた場所の地域調査としての学習成果が上がるように、事前学習、現地での活動、事後学習全体を通して調査計画を立てることが必要である。

このことで、この旅行・集団宿泊の行事を含めた社会科授業としての客観的な評価が可能となり、生徒の地理的技能の高まりを教師が実感できることになる。そのためには年間を通した授業計画の中にしっかりと位置づけ、さらには前年度からの準備が欠かせない。

○多忙化と授業時数減による授業計画の課題

社会科の授業計画に位置づけていくことが重要と述べたが、現実的には地理的分野の授業計画に旅行・集団宿泊の行事を意識した内容を盛

り込むことは簡単なことではない。旅行・集団宿泊的行事に教師がかかるエネルギーは大変大きい、学年職員や担任として自然教室、野外教室の準備に集中している中で、教科担任として「読図ハイク」を責任もって実施していくことは大変である。

現在、教師の多忙化が大きく取り上げられているが、小手先だけの多忙化解消の取組に終始しているのが現状である。学校教育の根本を変えていかなければ解決が難しいところがあり、すぐに多忙化解消とはいかないが、まずは授業計画について自らの工夫を生かすことが必要である。地理的分野全体の中で地図学習をどのように位置づけ指導していくか、小学校とのつながりも含めて考えていきたい。

なお、これらの課題を解決していくためには、教育課程の整理や柔軟な対応、教師の多忙化解消などと併せて、施設などの環境整備も必要である。文部科学省では、1980年代（当時は文部省）より学校への長期自然体験活動に関連する施策を次々に打ち出しているが、それとは逆に公的青少年教育施設は年々減少し、⁸ 経済的負担が困難な家庭の増加もあって、学校現場の課題は活動施設も含めた様々な範囲に及ぶ。

利用施設による「読図ハイク」のプログラム提供など、学校の教科学習を支援できる公的・民間施設の整備や社会教育団体との連携などを含めた環境整備も必要とされているのである。

の授業実態と教師の意識」新地理42巻1号（1994年）

4 例えば筆者のいた中学校は2013年度より修学旅行以外の宿泊行事を廃止、隣の中学校も2017年度より廃止した。

5 少年の野外教育の振興に関する 調査研究協力者会議・報告「青少年の野外教育の充実について 2. 野外教育の現状と課題（1）野外教育プログラム」より（文部科学省1996年）

6 江橋慎四郎「野外教育の理論と実際」P4,5（杏林書院1987年）

7 荒木快英「ウォークラリー入門」P6（遊戯社1981年）

8 文部科学省（1999年度調査までは文部省）「社会教育調査」の「設置者別、種類別の青少年教育施設」の比較による。この調査では、1996年度の調査をピークに、それ以降2015年度調査に至るまで青少年教育施設（非宿泊型含む）は減少を続けている。

【注】

1 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編P81

2 社会認識教育学会編「中学校社会科教育」第5章第3節（学術図書出版2010年）

3 篠原重則「中学校社会科学習『身近な地域』